

## 松野太郎会員がロスビー・メダルを受賞

この度、松野太郎会員（前理事長・東京大学名誉教授）が米国気象学会ロスビー・メダル（Curl-Gustaf Rossby Research Medal）を受賞し、去る1月13日テキサス州ダラスで開かれた年次総会の席上で授与された。かのロスビーの名を冠したこの賞は、米国気象学会で最も権威ある学術賞の1つで、日本人では過去に荒川昭夫会員、都田菊郎会員、真鍋淑郎会員の3氏が受賞しているが、日本在住者の受賞は松野会員が初めてである。

受賞理由となった松野会員の傑出した学問業績の1つには、同会員が1960年代半ばに確立した赤道 $\beta$ 面の線形波動理論がある。これは、その直後に構築された赤道成層圏東西風準2年振動に関する理論に重要な貢献をした他、エル・ニーニョ＝南方振動の理論の基盤ともなり、赤道上の局所的熱源に対する大気の応答は「松野＝Gillパターン」と呼ばれている。1970年以降は、ロスビー波の鉛直伝播に関する理論研究を精力的に推し進め、波と平均流との相互作用の観点から成層圏突然昇温の理論を世界に先駆けてうち立てた。さらに、ロスビー波に伴う流体粒子の運動に関する理論研究は、波動と平均流との相互作用の理解をより一層深めただけでなく、その後発展した成層圏における物質輸送の研究の理論的礎ともなった。同会員はこれ以外にも、鉛直伝播する内部重力波が中間圏界面付近の平均循環場の形成に重要な役割を果たすことを理論的に示した他、「松野スキーム」と呼ばれる時間発展方程式の数値積分法も提案した。松野会員のこうした卓抜な学問業績に対しては、既に日本気象学会賞や日本学士院

賞等が贈られている。

その一方で、松野会員は、昨年理事長を辞するまで長きにわたって気象学会常任理事を務める傍ら、日本学術会議の各種委員や文部省測地審議会等の委員として、我が国のWCRP（世界気候研究計画）への取組みをリードし、特にTOGA-COARE（熱帯海洋全球大気研究計画・大気海洋結合系研究実験）を強く推進した。その後、1990年代前半には、全国の生態系研究者や超高層物理の研究者らとともに行われた大規模共同研究「アジア・太平洋域を中心とする地球環境変動」（通称、「新プロ」）を統括した。さらに近年には、科学技術庁の航空・電子等技術審議会地球科学技術部会長として、地球フロンティア研究システムや地球シミュレータ等の新しい大型プロジェクトの推進を強く提言し、現在は前者の初代システム長を務めている。今回の受賞には、松野会員の卓越した学問業績に加え、我が国の気象学会全体の発展のために果たした多大な貢献に対する評価も加味されている。因みに、こうした松野会員の貢献に対しては、既に日本気象学会藤原賞が贈られている。

詳細な受賞理由は、米国気象学会機関誌（Bulletin of the American Meteorological Society）本年6月号に、受賞に臨む松野会員の写真とともに掲載される予定である。なお、松野前理事長の業績をまとめるに当たり、特に学会全体への各種貢献に関しては、東京大学気候システム研究センター長の住 明正教授からのご教示に負うところが多かった。記して感謝致したい。

（東京大学大学院理学系研究科 中村 尚）